

# みんなのページ

## 黒部溪谷エコツアーと吉村昭著『高熱<sup>ずいどう</sup>隧道』を読んで

昨年11月のエコツアーでは黒部峡谷を訪れた。一行は宇奈月からトロッコ列車に揺られ終点櫛平で一旦下車、ここから乗り換えて数分だけ下車、トロッコ車両も積載できる大型エレベーターで200m昇る。そこで軌道は前後に分かれていて私たちは後の軌道を歩き、後立山連峰を望むパノラマ展望台まで登る。一方、前方の軌道はさらに奥の方へ進み黒部第3、第4発電所まで続いている。ふと壁の説明板に目をやると、この先のトンネル工事は難工事であり中間に高熱断層が存在すること、また作業員宿舎が雪崩で吹き飛ばされ80数名もの犠牲者が出たことなどが書かれており、この工事の状況は吉村昭著『高熱隧道』で紹介されているという。

吉村氏の小説は氏の信条として事実に反することは書かないことで有名であり、小説というよりは記録文学に入ることから、早速図書館から借りて読み始めた。

北アルプス連峰に源を発し富山湾に注ぐ黒部川はその急流と水量の豊かさで知られ、下流には明治の頃から発電所が多く設置されていた。大正期に入るとさらに上流部分にダムと発電所を設け、その電力を阪神方面に送る計画が持ち上った。それがこの隧道の目的となった仙人谷ダムと日本電力（現関西電力）の黒部第3発電所である。まず黒部川の急峻な絶壁を穿ち幅60cmほどの歩道（日電歩道）を作り、ここを重いセメント袋や資材を背負ったボッカ（歩荷）が往復する。荷を岩肌に引っかけたり足を滑らせたりして深い谷底に転落するものが相次ぎ、遺体も収容できないことも多々あった。

隧道工事は早速高熱断層にぶち当たる。岩盤温度は85℃で、更に高い所も現れる。高熱で削岩機を持つ人夫も後からホースで冷水をかけての作業、そのかけ屋もさらに後から冷水を

かけられている。一人一回の作業時間は20分とし一日の限度が1時間という短かさ。また高熱を帯びた岩盤のためダイナマイトが点火する前に爆発し多くの人夫が犠牲となったりする。さすがに工事を監督する富山県と県警察部は工事の中止命令を出す。しかし世界は第二次世界大戦へ向けて日本も軍備増強のさ中、軍需産業に供給する電力を生む使命を帯びたこの工事は政府の強い要請により工事が再開する。ところが昭和12年末の未明、志合谷に建つ5階建の作業員宿舎の3階以上と、80人以上が消え去った。2か月近く周辺を掘っても分からなかったが、一人の技師が山岳地帯に発生する泡（ほう）雪崩という特殊な現象があることを知り、搜索範囲を広げたところ、宿舎からひと山超えた岩肌に宿舎の残骸や遺体がたたきつけられているのを発見する。ここで再度県から工事中止命令が出る。もう再開は不可能かと思われたが、突然、天皇から犠牲者一名につき25円という御下賜金が下附された。これが、この工事の錦の御旗となり頑なに工事の再開許可を拒んでいた県当局も再開を認めざるを得ず、この後も数多くの犠牲者を出しつつ昭和15年11月高熱断層地帯を含む軌道、水路の隧道と仙人谷ダムは完工した。この間、転落、火傷、爆発、雪崩等により300名を超える人命が失われた。完工直後、人夫頭は工事の直接の責任者3名に直ちに現場を離れるよう促す。多くの仲間を失った人夫達の怨嗟が3人の命を狙っているという。3名は命からがら山を降りる場面で話は終わっている。

読後、トロッコ列車のこの先の隧道にこのような凄惨な事実があったことを初めて知り犠牲となった人々やその家族の無念さに思いを馳せた。是非ご一読をお薦めしたい。

前田紘志さん（茨城県石岡市在住）